

2026年8月16日

説教題『約束の虹の下に生きる』創世記6：5～22 ～創世記③～

主任牧師 加藤 誠

「わたしは人を創造したが、これを地上からぬぐい去ろう。…わたしはこれらを造ったことを後悔する」(創世記6章7節)

創世記6～9章は「ノアの箱舟」のお話です。「人の悪が増し、常に悪いことばかりを思いはかり、墮落し不法が満ちている」のをご覧になった神は「地上に人を造ったことを後悔」されます。ただノアと家族だけが神から選ばれて、箱舟を造るように命じられます。そして四十日四十夜の大雨の後、空に虹がかかり、神が「もう決して洪水を起こして滅ぼすことはしない！」と約束される…というお話です。

ちなみに、洪水が引いたかどうかを調べるため、ノアは最初からすを放つのですが箱舟に戻ってきてしまいます。次に鳩を放つと一回目は戻ってきたものの、二回目にオリーブの葉を加えてもどってきた。それで「オリーブをくわえた鳩」は「平和と希望の知らせ」としてピカソなど多くの芸術家が題材にしています。大井教会の礼拝堂のステンドグラスは「平和、鳩、聖霊」というイメージでステンドグラス作家の高橋恵子先生が製作くださったものですが、その鳩もオリーブの葉をくわえています。

ただ、この「ノアの箱舟」の物語はある意味で辛く悲しい物語です。以前この物語を読まれて「ノアの息子たちの妻たちの心を想うと胸が痛む」と言われた方の言葉が忘れられません。ノアには三人の息子がいて妻たちも一緒に箱舟に乗って生き延びるのですが、彼女たちの家族は洪水で犠牲になるからです。英国のJ・E・ミレイが描いた『箱舟への鳩の帰還』は、息子たちの妻と思われる二人の若い女性が鳩を抱きながら寄り添い合っている絵です。一人が鳩を胸もとに抱いてオリーブの小枝を見つめ、もう一人がその鳩にくちづけをしているのですが、二人に笑顔はなく、むしろ深い悲しみをたたえた二人のまなざしは、洪水で亡くなった家族を思い、そして生き残った自分たちのこれからの命を見つめているようです。

皆さんは、この「ノアの箱舟」のお話をどう読み、どんなメッセージを受け取っておられるでしょうか。このお話で、なぜ神は人間の罪を罰するだけでなく動物たちをも巻き添えにしたのかなどの問いにすべて応えることの難しさを覚えつつ、わたしがこの「ノアの箱舟」の話から受け取っているメッセージを挙げてみたいと思います。

一つは神の「深い悲しみと心の痛み」です。神は愛をこめて被造物一つ一つに命を与えられた。そして人間に「この世界を、深い知恵をもっておさめるように」大きな責任を託された。ところが、その神に「もうこんな世界は滅ぼしたほうが良い！」と思わせてしまうほど、この世界には人間の悪と不法が満ちている。6章11節12節の「墮落」という言葉は「破滅」という言葉です。「地球という神の祝福と恵みに満ちた世界を破滅に向かわせている人間」。その人間の愚かさに、神の心は引き裂かれて痛み、悲しんでおられる。それゆえ、このとき世界を覆い沈めた洪水とは「神が流された涙」だと思うのです。神に背を向け続ける人間は、造り主なる神の心を痛め、こ

の世界には神の涙があふれている。それが一つ目のメッセージです。

二つ目は神はその破滅に向かう世界に「信仰」を求めておられるということ。このときノアは、悲しみに引き裂かれた神の声を聞きとり、そしてその命令に従いますが、しかし神に背を向け不法が満ちている世界の中で、神の声に聞き従う道は容易ではありません。「箱舟を造りはじめた」ノアは人々から馬鹿にされたはずです。「お前は何をしているのだ？見えない神の声を信じて従うなんて、馬鹿じゃないのか？」と。

神がノアに認められた「正しさ」。それは「品行方正で立派な人格を持った、間違いのない人間」という意味での「正しさ」ではなく、「神と共に歩む正しさ」でした。先週、神がカインに求められた「正しさ」は「神との対話的な関係のことだ」と語らせていただきましたが、この世界の中で、見えない神の声を聴き取り、神の御旨を覚えながら「神と共に歩む」。その「信仰」を神は涙を流しながら求めておられる。「主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです」（Ⅰテサロニケ 5：10）。神に背を向けて破滅に向かう世界の中であって、私たちに求められている「神と共に生きる信仰」。その「信仰」を聖書は旧約と新約を貫いて、今日も求めておられます。

そして三つ目は「おびたしい犠牲の中を生き延びた者の使命と責任」です。ノアたちが再び地上に降り立つことができた時、彼らはどんな思いで土を踏みしめたのでしょうか。激しい嵐と不安と恐れの日々が恵みの中に守られ、生き延びることができたことへの深い感謝、箱舟の不自由な暮らしから解放された安堵と喜びから自然に笑みがこぼれたことでしょう。しかし同時に、洪水によって犠牲となったおびたしい命のことを考えざるを得なかったであろうと想像します。そして、これだけ天と地がひっくり返るような大災害の中を生き延びることができた自分たち、なお生きる機会を与えられた自分たちに託された使命の重さを考えずにはおれなかったのではないかと想像するのです。災害や戦争において、私たちは人の生き死にの不思議、人間の力の及ばない、神の御手の中にある命の不思議を目の当たりにします。「信仰がある者は生きのび、不信仰な者は滅びる」などという安直な「信仰因果応報説」は旧約聖書の中にも見られますが、しかしイエス・キリストはそのような「信仰因果応報説」を一刀両断にされて、私たち人間の目には不思議な神のお取り扱いと、そこに注がれている神の真実の慈しみの前にへりくだり、謙遜に生きることを教えてくださいました。

それゆえ、この「ノアの箱舟」は、犠牲になった人々の命の叫びを聴き取りながら、自分はこの世界でどう生きていくのかを真摯に問い、考えて続けていく使命に私たちを招いているのです。洪水の後に示される「平和と希望の虹」は「もう決して人間の悪のゆえに人間を滅ぼすことはしない」という神の約束であり祈りのしるしです。神は、愚かさと弱さを抱えた私たちを諦めずに祈り続けておられ、その祈りの延長線上にイエス・キリストを送ってくださいました。人間をその罪のゆえに断罪して滅ぼすのではなく、私たちが神の愛に立ち返って、神と共に生きる信仰へと私たちを招き続け、祈り続けておられる。この神の愛と祈りの約束を受け取り、この世界であって、主イエスと共に平和と希望をつくりだす働きに仕えていきたいのです。